

論文の内容の要旨

コスモグラフィーとしてのカテブ・ヤシン作品 ——アフリカ性と民衆の詩学をめぐって——

鵜戸 聡

本論文は、マグレブ（リビア以西の北アフリカ地域）における最も重要な現代作家の一人であるカテブ・ヤシン（Kateb Yacine, 1929-1989）と、そのフランス語による文学作品（詩・小説・戯曲）について論じたものである。

アラビア語文学に先んじることおよそ20年、1950年代に飛躍的發展を遂げたアルジェリアのフランス語文学において、カテブ・ヤシンは第一世代に分類される作家であり、現在その作品はすでに「古典」と看做されている。本論文では、その主著である二作品『ネジュマ』（1956）および『星の多角形』（1966）を研究の中心に据え、その歴史的背景から作品の構造・テーマに至るまでを詳細に分析した。

論文は三部構成となっている。

第一部「テキストのなかのアルジェリア——ネジュマをめぐって」は、カテブ・ヤシンについての基礎的な研究であり、アルジェリア現代史における作家の経験がマグレブ文学の金字塔と目される小説『ネジュマ』に結実していく経緯を、テキストを歴史のなかに再文脈化しつつ読み解いていくことによって論じている。

第一章「カテブ・ヤシンとその時代」では、独立（1962年）前後のアルジェリアの歴史的・社会的背景を確認しながら、作家の伝記情報を概観することによって本論への導入とする。

次いで第二章「屍体の経験と詩人の誕生——セティフ暴動と『包囲された屍体』」で、カテブ・ヤシンが文学とナショナリズムに目覚める決定的な契機となった1945年の反仏暴動（所謂「セティフ暴動」）にふれ、歴史的イベントにおける個人的な体験がどのようにして作品に取り込まれ影響を与えているのかについて、処女戯曲『包囲された屍体』（1954）を中心に分析を試みる。

第三章「『ネジュマ』の世界」では主著『ネジュマ』について概説をおこない、当時のアルジェリア文学にとって革新的であったその小説構造に注目する。時系列がばらばらの断章群からなるこの小説において、前後する時間は渦巻き状に進み、やがて書物の終わりは始まりに接合されて円環構造を作り出す。

その形式上の新しさに関してウィリアム・フォークナーの『響きと怒り』などの影響が指摘されているが、第四章「『ネジュマ』の文体——フォークナーとの比較研究」では、小説の構造のみならず文体もが英語圏モダニズム小説の影響を受けていることを指摘し、とりわけ「意識の流れ」による記述が時間軸を離脱しようとする傾向を持ち、そこに開陳される情念の渦が大きな暴力性を孕んでいることを論じている。

第二部「精読『星の多角形』——コスモロジーからコスモグラフィーへ」は、『ネジュマ』の続編とも位置づけられ、詩・小説・戯曲の形式が交じりあったジャンル混淆的な作品『星の多角形』（1966）の分析に充てられる。折々に独立して発表されたテキストを含み、時系列どころか内容的にもばらばらの断章群をゆるやかに束ねたこの書物は、これまでの研究において概括的あるいは部分的に論じらるばかりだった。それゆえ本論文ではあえて作品全体を通読し、全ての断章に言及することによってそこに何が描かれているのかを可能な限り明らかにし、一冊の書物としての『星の多角形』にいかなる構造がそなわっているのかを見出そうとする。

かくして第二部は、第一章から第六章にかけて作品本文の分析をおこない、終章「生成する書物のコスモグラフィー」において『星の多角形』の全体を振り返って書物の構造を把握しようと試みる。そこには、存在世界の発生に始まり起源への回帰（の失敗）に終わる枠組が見出されるのだが、その内部で幾人もの登場人物たちの物語がばらばらに展開され、彼らの彷徨とさまざまなモチーフやテーマの反復は、断章配列の自由さとも相俟って、一種のダイナミズムを作品に与えている。

『星の多角形』の断章は、『ネジュマ』その他の書物と作品世界をゆるやかに共有しつつ、そのひとつ一つが高い自律性を有したコスモス（物語小世界）となっている。それが偶然のようにして書物の形に束ねられることにより一つのコスモロジーが生じ、断章同士あるいは断章と書物とは互いに照応交感してより大きな詩的宇宙の鼓動を生むこととなる。そこで本論文は、この断章を延々と産出していくエクリチュールの運動を、コスモス・コスモロジーの著述誌として「コスモグラフィー」と名付けることとする。

カテブ・ヤシンは、（齟齬がありながらも）同一の世界を書き続けたことについて、「私はただ一冊の本の人間です」と述べている。彼が描き続けた断章が集積し、ひとつひとつのコスモロジーのもとに『ネジュマ』や『星の多角形』といった書物が生成する。そこに取められた断章は、書物がばらばらにされることによってコスモロジーを喪失し、一枚一枚のページとして「一冊の本」に回収されようとするのだが、その本は終わりが無いゆえに、一冊に綴じられて新たなコスモロジーを形成することはない。この、断片が書き続けられ、それが書物のコスモロジーを形成し、そして同時に高次の「一冊の本」へと解体されるという、生成・構造化・自己解体の絶え間ない循環運動こそがカテブ・ヤシンのコスモグラフィーなのである。

第三部「コスモグラフィーのなかの民衆」は、第二部終章において提出された「コスモグラフィー」の概念が主にその構造の面から論じられたのを承けつつ、翻ってその内実を問おうとするものである。

第一章「コスモグラフィーの諸相」はコスモグラフィーに見出されるさまざまな特徴を論じたもので、先に提起された反復の問題を突き詰めていく。まず、往年のカテブ研究の権威である故ジャクリーヌ・アルノーが提示した「断片の作品」という概念を乗り越えるものとして、コスモグラフィーの示唆する動態性に注意を促す。さらに、カテブ・ヤシンのインタビューから彼の述べる「円環」や「螺旋」がどのような意義を持っているのか推論し、コスモグラフィーのなかに幾度もあらわれる「挫折」や「潰走」が、逆説的ながらもむしろその反復によって運命に抗おうとすることを指摘する。最後に、個的存在としての人間が集団的存在である「民衆」に溶け込んでいくのを確認し、コスモグラフィーのなかに満ちる「民衆の生」と「個人の死」の相克を論じる。

第二章「アフリカとしてのアルジェリア」では、前章で述べた「民衆」という集合的生が文学テキストのなかで如何にして具象化されるのかを考察する。はじめに、民衆をあらわす代表的なモチーフとして「屍体」を挙げ、カテブ・ヤシンがマダガスカル反仏暴動の犠牲者たちに捧げた詩「彷徨える民衆」を分析し、マダガスカルの屍体とアルジェリアの屍体が連帯のうちに「アフリカ」の屍体として歌われることを指摘する。次に、そのアフリカを象徴する存在のひとつである「黒人」がカテブ作品のなかにどのように書き込まれているのかを確認し、部族の血に潜む黒人性の問題を検討する。さらに、幾度となく言及される古代

ベルベル王国「ヌミディア」を媒介に、アルジェリア民衆が潜在的に有している「アフリカ性」がテキストに浮き上がることを論じる。

第三章「言語と演劇」では、1970年代にカテブ・ヤシンが開始した口語アラビア語による演劇活動について考察する。フランス語から口語アラビア語へと言語的転換がおこなわれ、後者はなによりも民衆の言語として称揚されるのだが、これは民衆を描き出すコスモグラフィーとしてのカテブ作品が、口語演劇の上演によって民衆に直接差し向けられることでもあろう。

その演劇の特徴として円環状の舞台や歌の使用が挙げられ、ベルトルト・ブレヒトの影響も指摘されるどころであるが、カテブ・ヤシン自身の証言からはまずもってベトナムの伝統演劇「チェオ」がモデルとして考えられ、くわえてアルジェリアの大道芸「ハルカ」（環）にもその根を持つように思われる。

歌のなかで役者と観衆は一体となり、舞台上で演じられるのは民衆の生である。課された運命を活写すると同時に運命への抵抗でもあるカテブのコスモグラフィーは、民衆を描き、民衆によって動かされていくことばの宇宙であったが、民衆が演じ民衆が観衆である演劇空間は、謂わばコスモグラフィーの現実世界への顕現として夢想されたのである。